



死んだらどうなる

死んだらどうなる。
 「燃えて灰になって消えうせるだけ」
 たしかに「いのち」が物質だけのものなら
 そうに違いありません。
 だが、「もの」だけでない「こころ」をもつ
 ている人間は、太古の昔から 未来行く末ま
 でこのことに悩まなければなりません。齡が
 加わるにつれ人事でなく胸に迫ってまいりま
 す。

白鳥や蝶になって昇天する美しい魂を思い
 描いた反面、怨念復讐の鬼神怪獣になって七
 生さまよい仇をなす怨霊を恐れもしました。
 「しめ縄」を張って封じこめ、「御霊社」
 をまつて鎮魂慰霊をしなければなりません
 でした。

古い印度では「輪廻転生」(ちんねんせんじょう)と
 いうことが考えられていました。死に変わり
 生まれ変わって尽きるこのない旅を無限に
 続けるもの。

死んでからすぐに次の世に生まれ変わるの
 ではなくて、まだ行方定まらぬ、行き先未確
 定の「中有」(ちゅうぐ)「中陰」(ちゅういん)という四
 十九日間のまよいの期間浮遊しているという
 のです。この期間こそが大事、天下分け目と
 遺族たちは死霊供養・孝養のまことと精進潔
 斎し「忌み」の期間を励むわけです。

稚氣愛すべき美風であろうが、やはり「死
 んでしまつてからでは遅い」恨みがあるの
 はないでしょうか。

ともあれ、転生の契機になるのはなにか。
 それは一にかかつて今の私の「業」(ごう)(行為)。
 つまりわたしの今の仕業が次の世の結果を招
 くことになるのです。悪因苦果、善因楽果。
 地獄の種はわたしがつくるのです。

このように地獄におちるも極楽に生まれる
 のも私の責任と、「いのち」の重さを一身に
 背負い込み、それだけに一刻も休まぬ精進努
 力や善業を積み、その功成つて菩提仏果を獲
 得しようとする人達がいました。壮快と
 いうべきでしょう。

しかしそういう聖なる道に精進した人達が
 結局気づいた「いのち」の構造(縁起)の見誤り
 でありました。

わたしひとりの「いのち」のはかなさ
 そのわたしの「いのち」だけを当て頼りに
 生きている傲慢さと脆さ。虚仮不実。

「いのち」の真実は、無我。

無限に大きないのちのなかに願われて「生
 かされている」いのちと知らされたのです。

人間のこざかしい計らいを捨てて、わたし
 をめざめさせ摂取しようとはたらく本来のい
 のち(本願)に帰依する(よりかかる・より
 たのむ)ことで、生死を越えた真実清浄の世
 界に往生(往き生まれ)るのです。

死んださきはと思ひ悩むことはありません
 生きている今も、如来真実のいのちの中。
 生きるも死ぬも、本願のいのちの中。

そこに目覚め、それを慶ぶ、唯それだけで
 す。それが浄土真宗です。

このいのち 報恩感謝で 年の暮

神姫組 高田吉子

兵庫県区門徒推進員連絡協議会

本堂への渡り廊下に

豪華扉新調寄付

客殿への通路でもあるこの扉を復元の
 湯口博文文さま(建人社長)が新調ご
 寄付くださいました。
 ご披露して感謝の意を表します。

下水道工事完了

客殿トイレ、本堂トイレと庫裡の風呂・厨
 房・トイレなど広範な下水道敷設工事も、か
 なり長期を要しましたが、十一月中旬ようやく
 完成いたしました。



仏壮仏婦よりお願い 年末餅つき

十二月二十七日 午後二時より

除夜会

十一時より

お鏡餅や除夜会の雑煮餅を扱きます

奮ってご参加を

葬儀

平成十二年七月十日 太田

坪木 伸子 さま

五十六歳

平成十三年十一月十日 矢根

永井 きぬさま

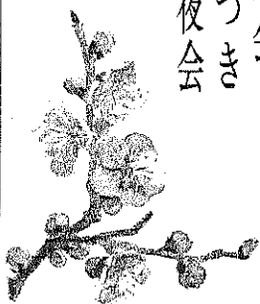
八十二歳

十二月のごよみ

◆前任職 ◆住職

- 一日 正法寺報恩講◆
- 二日 谷原富雄氏宅法事◆正法寺報恩講◆
△日同役員員△△(城崎)
- 三日 検診
- 四日 DS 唐川報恩講◆
- 六日 遊友クラブ◆奥小谷報恩講◆
- 七日 DS 出石組内会
- 八日 沢田寿造氏宅法事◆
- 九日 出合報恩講◆
- 十日 ボランティア研修会
保谷・日殿報恩講◆
教区布教使育成研修会(神戸)
- 十一日 市場報恩講◆・DS
- 十三日 小田報恩講◆
- 十四日 小田報恩講◆ DS
- 十五日 小田報恩講◆
- 十六日 太田・東里報恩講◆
- 十七日 永井五男氏宅法事◆
- 十八日 野尻・矢根報恩講◆
- 十九日 あすなる交流会
- 二十日 DS 検診◆ 暮坂報恩講◆
- 二十一日 片間・丸中報恩講◆
友遊クラブ
- 二十二日 DS 豊岡報恩講◆
- 二十三日 横山広義氏宅法事◆
- 二十四日 口小谷報恩講◆
- 二十五日 DS
- 二十六日 DS
- 二十七日 教区基推企画常任委員会
餅つき
- 三十一日 除夜会△△

年の暮を聞く△△





春が来る

「わたしは本当に幸せ者です。心優しい家族親族にはぐくまれ、いいお友達にかこまれて、なんの不足もなく楽しく悔いなく過ごせてまいりました。周りに対し、ただただ感謝あるのみです。」

だが、そのような幸せ一杯、慶び一杯の人生を過ごして来た私は、一体どこに行くのでしょうか。どうなっていくのでしょうか。やがて死にます。

今まで幸せに過ごして来ただけに、その人生とおさらばして、死んで、いったいそれからどうなるのでしょうか。

お浄土が見えませんか。行き先が分かりません。今、わたしとても不安です。どうしたらいいのでしょうか。」

その方が亡くなる半月ほど前だった。すぐお隣の、それも仲良しだった人の忌明け法事の日、縁に休んでいる私にすがるように訴えてくださった。

そのときわたしは何をどのように答えたのかあまりにも逼迫した雰囲気だったので、余りよく覚えていない。

あれから三年。今にしてじっくりと思い出そうとしている。

「ほとけさまやお浄土というのは、私が自分の足で歩いて行ってお参りできたりお会い出来たりするものではない。まして、死んでから後にたどり着ける所でもないと思います。そうではなくて、向こうの方から私に向けて迫って来てくださるものです。例えば、今は寒い寒い冬だけど、その冬をわたしが払いのけて、頑張って退治して、それで、春までたどり着くのでしょうか。そうではありますまい。寒い寒いと震え苦しんでいるその間に、私が知らぬ間に、春は向こうからやってくるものです。」

つらい苦しい、仏様が見えないと云っているあいだにも、ほとけさまの方から、お浄土の方から、私に迫って来てくださっているのかも知れません。

お念佛唱えて、そのことに目覚めさせてくださいませようよ。」

そうお話するや否や、その人は、ぱっと明るい表情におなりになりました。そして「ああ、もう露の臺がでてくるかも知れませんが、とってきてあげるから待っていてね」私、アツケにとられていた間に、小躍りするように、わたしの前から去って行かれました。それが私との最後の別れでありました。

最後のわかれではありましたが、わたしはあのときのあの姿、それをとおしてわたしが教えていただいたことをいまままで何度も何度も繰り返し繰り返し思いだし、新たに念佛もうすことであります。



ごめんなさい

最近、おとしよりが、ことに触れ折りにつけてお使いになるある言葉に触発されて、今のわたしにとって、大事な大事なことがらを、深刻に考えさせられました。

そのお年寄りのこととは、「ごめんせえー」、「ごめんなさい」、「ごめんください」ということばです。

辞典字引を調べてわかったこのことばの心は、「お許しくださいませ」と謝りながら、許しを乞いながら小腰を屈めて恐る恐るさせていたいただきますという、そんなこころのことばです。

なぜそうしなければならぬのか。「お前はひとかど善人ぶって、ボランティアやってるんだらうけれど、おまえは実は、人の職場を奪っているのだ。」

「いま世の中は深刻な大不況。リストラだ、人員整理だ、沢山の人が職場から追い出されて、失業者で一杯なんだ。働きたいのに仕事がない。そのために自殺する人まで出ている現状。」

私、愕然といたしました。知らず知らずに、わたしは、ひとの働き場を横取りしていたのだ。

ましてわたしは、ボランティアだ、人のためにしてあげているんだ、いいことをしてやってるんだなどという、独りよがりの高慢な心がなかったとは言えまい。



そのわたしに、「雑毒の善」という親鸞さまのことばが聞こえて来た。親鸞さまは、この世の愛・慈悲は、愛を一貫し慈悲一筋に貫き通すことは出来ないもの。「この慈悲始終なし」と嘆かれた。また「この世の善意・善行というものは、所詮、毒を含んだ毒饅頭のようなもの。われひとりよしとするエゴ、利己主義からはなれられないもの」

「小慈小悲もなき身にて 有情(ごき)利益(ごぎ)はおもうまじ」
《有情利益》。人のためにしてあげようなど思い上がりは慎もう。

そうではなくて、迷惑をかけているかもしれない、悪いことをしているかもしれない。どうぞお許しください。ごめんなさい。詫びながら、謝りながら、親鸞さまもお年寄りたちも生きていかれたのだろう。福祉センターへの道すがらの寺にこんな掲示が出ていました。

秋のおたより

金子 みすゞ

山から町へのお便りは、
「柿の實、栗の實、熟れ候、
ひよどり、鶉、啼き候、
お山はまつりになり候。」

町から山へのおたよりは
「燕がみんな、去に候、
柳の葉つばが散り候、
さむく、さみしく、なり候。」

